

# 授業力向上プロジェクト2016

学力向上委員会

## 1 本校の現状

若狭高校は、学校再編および学科再編によって、国際探究科、理数探究科、海洋科学科、普通科の4学科体制となり、今年度で4年目を迎えた。普通科の中には商業系大学進学コースも設置されており、多様な学科とコースが存在している。そのため本校には、大学進学、専門学校進学、就職など、様々な進路意識を持った生徒が在籍し、生徒のニーズも多様である。進学先がほとんどバラバラといった状態のクラスも存在する。このような状況の中で、本校ではクラスの適性に応じた授業を展開していく必要がある。

また、本校は若手教員が非常に多いのが大きな特徴であるが、今年度も20代の教員が19名と、非常に多くの若手教員が配属されている。若手教員が多いことは、学校全体を活気づけることにもなっている一方で、生徒指導や授業の面で課題が多いという一面もある。このような状況を踏まえ本校では、授業研究会や若手教員授業力向上塾など、様々な取り組みを実施し、若手教員のレベルアップを図ってきた(これまでの本校の取組については、福井県立若狭高等学校編『研究雑誌 第44号』「校内研修プロジェクト～授業力向上を目指し、学び続ける教員集団へ～」、『研究雑誌 第45号』「校内研修プロジェクト2014」および『研究雑誌 第46号』「授業力向上プロジェクト2015」を参照)。特に若手教員授業力向上塾については、若手教員が多いという本校の特徴を活かした取り組みであるといえる。そこで本稿では、11月に実施した授業研究会および若手教員授業力向上塾の取り組みについて、特に若手教員授業力向上塾を中心に報告する。

## 2 授業研究会(11月17日(木)実施)

この授業研究会は、一昨年度から始まった取り組みで、実施日の5・6限目を利用して全教科が公開授業を行い、その後各教科に分かれて研究協議を行うという流れになっている。

### 【公開授業一覧】

教科	クラス(場所)	科目・内容等	授業者
理科	2-2 理数探究科	理数物理 ドップラー効果	野坂卓史
英語	2-1 国際探究科	総合英語 Lesson7 Inspired by Nature	梅田武幸
水産	2-3 海洋科学科・海洋探究コース	課題研究 課題の設定	小坂康之
国語	3-3 海洋科学科・海洋探究コース	現代文 明治と平成のティーンエイジャー	渡邊久暢
地歴	2-9 普通科	日本史 戦国時代	横田和也
数学	1-6・7・8 普通科	数学A 確率	吉岡弘和 大角 渉 西川昌美 松宮大樹
体育	2-1・2 文理探究科・男子	体育 鉄棒	清水幹郎



国語科の公開授業の様子



理科の公開授業の様子

各教科とも、大学教員や本県指導主事、県外教員などを講師として招聘し、指導・助言をしていただく。しかしそれ以上に、研究協議では小グループに分かれ、授業についてグループで意見交換が行われていることが大きな特徴である。こうすることによって、研究協議の参加者全員が発言する機会が与えられ、決して「傍観者」になることなく研究協議に参加することができる。従来の研究協議にありがちな、助言者やベテラン教員が一方向的に話すということが起こらない。これについては、この授業研究会で数学の助言者としてご参加いただいた酒井淳平先生（立命館宇治高校）が、「学びの場.com」にご投稿されている。以下、少し長文になるが、引用する。

（全文は以下の URL を参照 <https://www.manabinoba.com/tsurezure/015666.html>）

一つは授業研究会の参加者みんなで授業について分析するという事です。指導助言の私も授業者もグループワークに参加しました。ふせんを使って作業をし、あとでみんなでまとめるので誰か一人の意見で全体が決まるということがありません。何より授業について焦点化した話し合いができます。授業研究会でよくある質疑応答では質問者が質問したいことを聞くのですが、授業批判ばかりになったり、質問者が持論を長く述べるということも起こります。若狭高校ではこうしたことが起こらない仕組みができていました。二つ目は「参加者が聞きたいことを助言者に聞く」ということです。私がお役にたてたのかはともかく、事前のリクエストが明確だったので、リクエストの中で私ができることややってきたことを中心にお話しさせていただきました。今回助言者という立場になってはじめて、何を期待されているのかがわかっていることの重要性に気づきました。もしもこうしたやり取りが事前になれば、抽象的な話をして終わってしまったかもしれません。何より“一応助言者だからしっかりしたコメントをしたい”など変な意識を持つことで、参加者のニーズや生徒実態とかけ離れた話をしていたかもしれません。こうしたことが起こらないようになっていました。

このように、本校の研究協議では、参加者全員が平等な立場で自由な意見を言い合う雰囲気醸成されており、活発な意見交換をする場となっていることがわかる。このような空気感を大事にしながら、よりよい授業研究会となるよう、工夫していきたい。

### 3 若手教員授業力向上塾

#### (1) 取り組みの概要

この取り組みは、一昨年度から始まったものであるが、昨年度から、20代および新採用の若手教員（本校では「塾生」と呼んでいる）4名程度に対し、ベテラン教員（同じく「師範」）1名を配置したグループを編成した形で実施してきた。この取り組みの大きな特徴は、グループを教科の枠を超えて編成している点である。

この取り組みの詳細については、福井県立若狭高等学校編『研究雑誌 第46号』「授業力向上プロジェクト2015」および本校HP（<http://www.wakasa-h.ed.jp/>）をご参照いただくとして、概要だけ説明する。基本的な流れとしては、①メンバーの授業を見学、②意見交換会、③「ラブレター」を渡す、となっている。最初に授業を公開するのは師範となっており、月に1回もしくは2回のペースで授業を公開していくこととなる。

参考資料：今年度のグループ編成

☆鋸屋智（社）	☆中村秀明（数）	☆高鳥通（英）	☆澤村文明（数）	☆上北克也（国）	☆中村和浩（理）
高橋慧（理）	勝山智央（理）	野坂卓史（理）	脇本千寛（理）	○高野和樹（数）	西川昌美（数）
前田瑛士（数）	宇多浩美（音楽）	松宮大樹（数）	大部晴也（数）	寺島啓介（社）	横田和也（社）
松宮拓也（英）	山田麻未（英）	西川真代（国）	○大橋夕紀（英）	山下恵理子（国）	○内藤祥子（国）
巢守美徳（保健）	○山田繁（社）	橋本洋平（英）	城戸良晃（社）	水谷友梨（英）	梅田武幸（英）
○小坂康之（水産）		○田中真由子（社）	○渡邊久暢（国）		

※☆は師範、○は中堅教員、()内は教科を表す

以下に、今年度新たに実施した内容およびそこから見えてきた課題等について記述する。

今年度は、この取り組みをさらに充実させるため、若手だけでなく中堅教員（主に30代～40代）の有志を募集し、自主的に参加したことである。こうすることで、より幅広い年齢層のメンバーでグループが編成され、より多様な視点から授業について議論が展開された。昨年までは、この中堅教員の参加はなかった。今年度参加した中堅教員の声を紹介する。

自分も新採用や2年目の時に、同じことで悩んでいたことを思い出しながら、意見交換ができる。自分の経験をもとにアドバイスができるし、自分の実践を振り返るいい機会となる。

同じような思いを、5経年や10経年のクロスセッションで抱くのではないだろうか。つまり、そのような研修の場でしか感じない、あるいは経験しないことを、本校では普段から考えることができる。さらにこの中堅教員は、「年代が色々なので、様々な視点から議論ができるし、経験から染み出してくる技も教えてくれる」と、幅広い年代の教員が参加するメリットについて語っている。

また、この取り組みはベテラン教員にも大きな刺激を与えている。あるベテラン教員は、こう語っている。

今年度から授業の中にグループワークを導入した。個人で考えたのち、グループで模範解答を作り、再び個人で考えるという形の授業を展開した。こういうことを始めようと思ったきっかけが、この若手教員授業力向上塾だった。

これまで多くの経験を積んできたベテラン教員であるがゆえ、自分の授業スタイルを変化

させることは難しいと言われている。しかし本校では、若手や中堅教員からベテラン教員が刺激を受けている。若手教員授業力向上塾の本来の目的は、その名の通り若手教員の授業力向上であるが、この取り組みが中堅・ベテラン教員にも、自分の授業を見つめ直す機会を提供している。

このように、参加している教員に大きな影響を与えている最大の要因は、グループ編成が「教科の枠を超えている」点であろう。これについては、多くの教員がいい取り組みであると口を揃えて語っている。この点について、この取り組みに参加している教員の声を紹介する。

自分の専門教科とは違うから、授業の中身については話ができない。しかしその分、授業中の生徒の行動をどう読み取ればいいのか、生徒の発言をどう拾えばいいのか、といった話題が自然と多くなっていく。

普段の公開授業における研究協議などでは、普通は同じ教科同士で議論するため、どうしても授業の内容や扱う課題など、授業の中身の議論に終始しがちである。しかし、メンバーの教科がバラバラであるため、意見交換会では、授業中の生徒とのコミュニケーション法、発問のタイミングや方法など、あらゆる教科に共通する、つまり授業の「技」に関する内容になっていく。もちろん、教科の内容も重要である。しかし、長い時間をかけて念入りに教材研究をし、綿密に授業を構成しても、上記のような「技」をうまく使えないと授業はうまくいかない。おそらく、これが多くの若手教員が最初に超えなければならない壁であろう。この壁を超えるための「技」をベテラン教員が若手教員に伝えていく場として、若手教員授業力向上塾が機能している。

## (2) 取り組みの課題

次に、この取り組みの課題について2点述べる。1点目は、グループの編成方法である。現在は、教科・年齢・男女の3つのバランスを考慮しながらグループを編成している。このグループ編成について、例えば、同じクラスを担当している教員同士でグループを作ると、自分の教科では見られない生徒の姿を発見することができる。また、同じ問題意識を持った教員同士でグループを組むことで、共通の視点で授業を見ることができる。このように、今はランダムに編成しているグループ（これはこれで有意義な点もある）であるが、特定の目的に沿ったグループを編成することも可能であると考えられる。

2点目は、この取り組みの運営についてである。現在は、各グループの中でリーダーを決めてもらい、そのリーダーを中心に運営している。これによって、柔軟な運営ができて一方、放課後の時間がなかなか取れなくて意見交換会に出席できない教員が出てくるなどの課題も見られる。この点に関しては、有効な解決策がなかなか見つからないのが現状であるが、いずれにせよ、参加している教員の負担感を最小限にしながら運営していかなければ、この取り組みは続かない。「普段なかなか授業を公開することがないので、これがいい機会である」「普段は忙しくてなかなか授業を見に行く時間が取れないが、強制かもしれないけれど、このような機会は貴重である」といった前向きな意見がある一方で、負担と感じてしまう場合もある。この負担感をなるべく少なくするための何らかの工夫をしていく必要がある。

#### 4 まとめ

本校では、以前から年に2回の公開授業週間が設定されており、授業互見を進める機会が設定されてきた。さらにそこに、授業研究会や若手教員授業力向上塾などの取り組みが定着することで、授業を公開するハードルが下がってきていると感じる。このような状況を好機と捉え、お互いの授業を気軽に見合うことが若狭高校の文化となるまで、発展させていく必要がある。例えば本校の数学科では、教科会の最後の10分間、担当1人が問題を持ってきてみんなで検討するという実践が今でも継続している。このような地道な取り組みを、さらに拡大させていくことで、このような取り組みが無くても、普段から授業内容や方法について、教員同士で意見交換ができる雰囲気を作っていく必要があることを大きな課題としてあげ、本報告を終了する。